

## 2013 年度ドクター研究員研究活動実績報告書

<small>ふり 氏</small> <small>がな 名</small>	<small>きんじょう 金城</small> <small>みゆき 美幸</small>
<p>(研究テーマ名)</p> <p>パレスチナ人のナショナル・アイデンティティの構築過程の検討 —破壊された村落地誌を通して—</p>	
<p>(研究活動実績)</p> <p>1. 学会報告</p> <p>(1) 金城美幸「パレスチナ人のナクバとオーラルヒストリー——ビレッジ・ブックスの考察を中心に」日本中東学会第 29 回大会、大阪大学豊中キャンパス、5 月 12 日</p> <p>(2) Miyuki Kinjo. "Reconstructing Palestinian Topography, Recreating Palestinian Nationality." International Geography Union Kyoto Regional Conference, Kyoto International Conference Center, August 7.</p> <p>2. フィールドワーク</p> <p>2013 年 6 月 22 日～2014 年 3 月 31 日 エルサレム滞在</p> <p>本研究の目的は、パレスチナ人の歴史家によるオーラルヒストリーの内容および方法論を抽出し、イスラエル人との歴史認識論争との関係の中で、その可能性と課題を検討することである。研究対象は、ヨルダン川西岸地区ビルゼイト大学「パレスチナ社会研究・記録センター」から出版されたモノグラフ・シリーズ「破壊されたパレスチナ人村」で、1948 年のイスラエル建国に伴い破壊されたパレスチナ人各村についての、難民たちの証言に基づく地誌となっている。</p> <p>本研究は占領下パレスチナ社会での文献収集や方言の読解を必要とし、現地調査が必須である。今年度は外部資金等の獲得により、9 か月の海外調査を可能とすることができた。論文発表には至っていないが、国内外での口頭発表を重ねるなかで、パレスチナ社会の歴史記述の多様性についての見通しを得た。現在、これらの成果を発展させた研究ノートを学会誌に投稿している。</p> <p>今年度の到達点として、①著者へのインタビューからモノグラフの方法論上の異なりを見定めることができた (2013 年 5 月第 29 回中東学会にて発表)。②難民を対象としてモノグラフの配布・活用状況についてのインタビューを行うことで、こうした地誌が難民の再ネットワーク化を促す媒体となっている点を確認した。(2013 年 8 月 International Geographical Union Kyoto Regional Conference にて発表)</p>	